シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第14回

中部森林管理局技術普及課
井上（いのうえ）　日呂登（ひろと）

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「植付（うえつけ）」

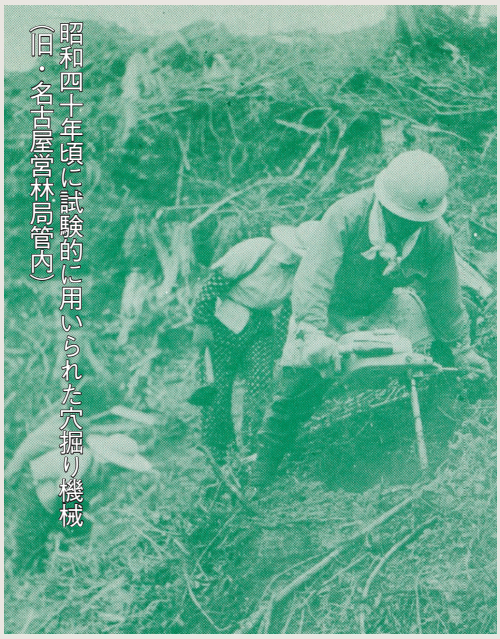
苗木を山に担ぎ上げ、鍬（くわ）で穴を掘り、植え付ける。植栽、植林作業、いわゆる植付は昔も今も基本的な作業内容が殆ど変わっていないものの一つです。

昭和30年頃の植付の様子
（現在の飛騨森林管理署、阿多粕（あたがす）国有林にて）

大正２年の植林終了記念写真
（現在の愛知森林管理事務所、段戸（だんど）国有林にて）

とかく多くの人出が必要な作業ですので、古くは近隣の地域住民が老若男女問わず集められ、植付に従事することもありました。現在の成長した森林の存在は、こうした人々の植付作業の苦労抜きには語ることが出来ません。

昭和三十年代後半より、穴掘り機械の導入が検討されたり、苗木の輸送にヘリコプターが部分的に導入されたりと、作業の効率化が模索されてきました。近年ではコンテナ苗の導入やドローンによる苗木の輸送などの低コスト化が試みられており、植付作業にも新たな風景が見られるようになってきています。



昭和四十年頃に試験的に用いられた穴掘り機械
（旧・名古屋営林局管内）

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。
これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、ＱＲコードを読み込んでください。